經云、胡麻皆園圃所種、稀復野生、苗梗如麻、而葉圓銳光澤、嫩時可作蔬、王念孫曰、有黑白紅三種、高者四五尺以來、其莖皆方、紅白二種皆四稜、黑者獨六稜、夏秋間作黃華、九月收實、白者子多、作油甚香美、黑者不及、而入藥則良、

〔類聚名義抄二肉〕胡麻五萬、訛云ウコマ、〔同七广〕胡麻俗音五マ、訛云ウコマ、〔同七子〕胡麻子ホコマ

〔本朝食鑑二華和異同〕胡麻

沈存中筆談曰、漢使張騫始自大宛得油麻種來、故名胡麻、此所以別大麻也、葉名青蕤、莖名麻蕡、音皆亦作稭、巨勝詳于本條、李時珍曰、胡麻取油、以白者爲勝、服食以黑者爲良、此爲確論、今本邦亦然、又曰、麻枯餅乃笮去油麻滓也、亦名麻粉、音辛、荒歲人亦食之、可以養魚肥田、亦周禮草人、强堅用賁之義、必大○平野按、枯餅非餅、笮後油滓、壓堅作餅形者也、今本邦細碎抹餅稱胡麻餅、其養魚肥田亦然、凡草木瘦凋者、臘月樹根四邊土中埋麻胡、則至來年枝葉麗、花子繁矣、

〔成形圖說二十五穀〕伊曾仁即胡麻也、蓋古名と云、未考得ず、

宇吳麻和名鈔引本艸注、音五馬、訛云字古末、按に胡を濁音に讀は、郡名考に、上野國多胡郡の胡音如吳とある類なり、又胡麻唐音ウーマー、しからば字は胡の唐音にして、此間に元より有來る胡麻の外に、舶來の種を指して宇胡麻といひしを、後は音便に從て吳麻とのみ呼びしとは見えたり、　炒荏イリエ胡麻の實炒ざれば宜しからざるの實言也○中略

吳麻てふ名上世には聞えず、式令の頃は專用ひられて、奉繕にも供べき、新撰字鏡に、青蕤を胡麻葉と訓たれば、いと早く胡麻の名はありけらし、今尙山野自生のものありて實を成せり、後に外域より貢れるが、子も大きく巨勝などいひし類にて、且其功能等の說よろこびて、食料に用ひしにや、西土も如斯ぞありぬらし、素問經云、麻麥稷黍豆爲五穀、麻卽今油麻、中國有四稜六稜者、張騫從外國得八稜黑種、故又曰胡麻、是始より麻てふ者ありしを、胡地より獲しが色黑く子太かりしほどに、胡麻と名けしなり、天工開物云、胡麻卽脂麻、相傳、西漢始自大宛來、古者以麻爲五穀之一、若專以大麻當之、義豈有當哉、竊意、詩書五穀之麻、或其種已滅、或卽菽粟之中、別種而漸訛其名號、皆未